



編集後記

皆さん、ダン・アリエリーという名前を聞いたことがありますか。アリエリーはアメリカで活躍している行動経済学者で、2012年に日本でも出版された「ずる(嘘とごまかしの行動経済学)」という著書で有名です。

それまで、「人の行動は合理的か」という命題に対する回答は、ゲーリー・ベッカーという学者が提唱した「費用便益計算法」という考え方が有名でした。「費用便益計算法」によると、人は「犯罪から得られる便益」と「つかまる確率」そして「つかまった場合に想定される処罰」これらを天秤にかけて行動しているのだ、というものです。この考え方、一定限は納得できるものの、「そうなの?」と疑問を呈したのがアリエリーでした。アリエリーが重視したのは、「不合理な力」と言ってよいようなものが人の行動を決定する重要な要素ではないか、というものです。

そのことを検証するために、アリエリーは様々な実験をおこなっています。その詳細は著書「ずる」を読んでいただくとして、結論だけを言ってしまうと、「私たちの行動は、相反する動機付けによって駆り立てられている。つまり、一つは、ごまかしから利益を得て、自分に満足したいという『金銭的動機』と、もう一つは、自分を正直で立派な人物だと思いたい。鏡に映った自分の姿を見て自分に満足したいという、心理学者が言うところの『自我動機』と呼ぶもの、この二つがある」と言います。だから、アリエリーは「誰もが不正をおこなう(少なくとも「おこなう」可能性がある)」と言います。私たち一人ひとりが絶対的に「罪深く」ならない程度にごまかしをする。そして、自分なりの限界を定めているのだと。

それでは不正、そして不祥事はなくなるのでしょうか。アリエリーはこんな実験をして「不正を減らすこと」ができることを証明しました。それは、イェール大学とMITで行われた実験で、生徒を2群に分け、1群ではテストの前に「私はこの実験が、イェール/MIT 大学倫理規定のもとに行われることを承知しています」という文面に署名をさせ、もう1群では通常通りテストをするというものです。倫理規定に署名をしなかった群に比べ、署名をした群では全くごまかしがなかったとのこと。不正に対する、倫理規定の有効性を示すものです。

実は、この話にはオチがあって、アリエリーが実験を実施した当時、イェールもMITも倫理規定と呼べるものはなかったそうです。このことは、人に自分の倫理基準を思い出させるものを与えれば、ごまかしをしようという意欲と傾向を弱めることを示しています。

多くの企業では「企業行動憲章」と言えるものが定められています。企業活動をするにあたっての、行動規範・倫理規定といったものです。コンプライアンス教育で、しっかりと従業員全員が倫理規定を学習することは、不正の排除、不祥事の撲滅に向けて、意味のあることだということが、アリエリーの実験からも裏付けられています。

アリエリーの著書「ずる」、皆さんもお手に取ってみませんか。

(Y I)

■ 編集

日本ジェネリック製薬協会
総務委員会広報部会

■ 発行

日本ジェネリック製薬協会
〒103-0023 東京都中央区 日本橋本町 3-3-4 日本橋本町ビル 7F
TEL: 03-3279-1890 / FAX: 03-3241-2978
URL: www.jga.gr.jp